

大友氏時について

矢島 嗣久

一 大友氏と南北朝時代

平成四年（一九九二）二月頃の新聞に別府市乙原のラクテンチ内にある、南北朝時代の武将大友氏八代氏時建立の吉祥寺跡から宝物が掘り出されるかという記事が出た。数日後、この作業が市の教育委員会からストップがかかり、一時中断された。結果的には三月になって発掘作業が再開されたが、期待の宝物は出てこなかったようである。

今からおおよそ六百六十年前の南朝元弘三年（北朝正慶二年、一三三三）五月、上野国（群馬県）新田庄の武将新田義貞の攻撃によって鎌倉幕府第十四代執権北条高時が東勝寺で自刃し、鎌倉幕府は滅亡した。

鎌倉幕府滅亡の直前にあたる元弘三年三月には、大友氏四代親時の三男、六代貞宗が豊後国守護職以下の所領

所職を五男千代松丸（のち七代氏泰）に譲り、嫡子単独相続制を採用した。

同年十二月三日には、上洛していた大友氏六代具簡貞宗が京都において病死する。

貞宗の次男貞載は筑前立花氏（福岡県粕屋郡新宮町及び久山町、立花山城主）の祖となった人物であるが、建武二年（一三三五）十一月から翌年一月にかけて、足利尊氏が朝廷に背いた時、一族及び豊後武士団を率いて上洛し、南朝方新田義貞の軍に従って北朝方の足利尊氏及び尊氏の異母弟直義軍を攻撃した。

この時大友貞載が伊豆野山で足利尊氏軍に内応（内通）したため、天皇方（南朝）の新田義貞軍は全面的に敗北して京都に退いた。

貞載は、このことを恨みに思った南朝方の武将結城太

田判官親光（ほろがみちあき）に京都樋口東洞院付近（下京区烏丸五条の北西）において不意討ちに合い、貞載が組み討ちして親光の首を討ち取ったが、その傷がもとで翌日（二月十四日）死亡した。

大友貞宗の三男で、貞載の弟宗匡（むねむね）が兄貞載の跡を継ぎ筑前立花氏を称した。その子孫には筑前立花山城主、後筑後十三万二千石柳川城主となった立花宗茂（むねたけ）が輩出する。

二 豊後玖珠城の戦い

延元元年（建武三年、一三三六）二月、足利尊氏が楠正成、新田義貞と摂津（大阪府西部）に戦って破れ九州へ落ちてきたが、同年四月には大軍を率いて京都へ攻め上った。尊氏に従ったのは、大友氏泰、少弐貞経の嫡子頼尚（よりたか）、島津貞久の四男氏久らである。

当時大友貞宗の五男十代松が、將軍足利尊氏の猶子（養子）となって氏泰と名乗り、弟七男宮松丸も氏時と名乗った。この時から大友氏は源姓を使用することになる。

貞宗の長男貞順（よりたか）は、七代氏泰の兄でありながら大友家の家督に選ばれなかったため、南朝方として豊後玖珠城

（切株山、標高六八五メートル、玖珠郡玖珠町）に立てこもり、九州に下った北朝足利尊氏方の一族である一色頼行軍（公深（こうしん）の長男、範氏（のりゆじ）の兄）と戦った。

頼行は軍勢を率いて筑紫太宰府を出発し、延元元年（建武三年、一三三六）三月二十四日から十月十一日の玖珠城落城まで、八ヶ月間にわたる攻防戦が展開された。

一色頼行は豊後の大友氏七代氏泰を副将にして、玖珠城に立てこもった氏泰の兄大友貞順を攻撃した。

籠城軍は南朝方で、大友一族では大友貞順、入田土寂（にゅうたしじやく）（大友四代親時の二男か）らが加わっている。

大友氏泰は延元二年（建武四年、一三三七）禅僧中厳（ぜんそうちゆうげん）に請うて大友氏祖先墳墓の地である鎌倉藤谷に住まわせ、同四年（一三三九）冬には父貞宗入道具箇の供養のため上野国利根庄（現群馬県利根郡川場村）に吉祥禅寺を創建し、中厳円月和尚を開山（寺院の創始者）とした。また氏泰や氏時の兄即宗和尚（貞宗の四男）は同利根庄の吉祥寺長老となった。

三 豊後吉祥寺

氏時は信仰心が厚く「豊後国史」によれば、興国二年（暦応四年、一三四一）、鎌倉から昌華祐公和尚を迎え、豊後国朝見郷朝見村御塔原（別府市乙原、現ラクテンチ内）に龍源山吉祥寺を創建する。その塔中としては東之坊、奥之坊、西之坊、天床坊、南之坊、岩之坊の六坊があったという。

上野国利根庄の吉祥寺は、初代大友能直の実母が「利根局」と称したこと、能直の嫡子二代親秀が「利根二郎」の別称をもっていることから、氏泰や氏時の兄即宗が住持となっていることもうなずけるわけである。この利根庄の吉祥禅寺は現在も存続しており、氏時の寺領寄進状や大友氏代々の位牌が保管されている。

懐良親王は後醍醐天皇の皇子（九男）で阿曾宮と称し征西將軍に任ぜられ、興国三年（康永元年、一三四一）五月、鹿児島指宿市の南方にある山川港に上陸した。親王の年齢は当時十四、五歳であったという。

興国五年（康永三年、一三四四）、大友氏六代貞宗の長男貞順・六男氏宗は南朝方、五男氏泰・七男氏時は北朝方の両派に兄弟がそれぞれ分かれた。

氏時は氏泰の同母弟にあたり、母は少貳盛経（経資の子、貞経の父）の娘という。氏時の童名は宮松丸、通称孫三郎といった。

標高一四〇メートルの別府市乙原山、ラクテンチ南側付近の吉祥寺跡には「当寺開山昌華祐公大和尚、貞和三年（正平二年、一三四七）丁亥一月廿一日」と刻まれた高さ一一三センチの開山塔（無縫塔）が現存している。これは昭和四十二年（一九六七）四月十一日に別府市の史跡指定となった。なお、同所には五輪塔群も所在している。



氏時供養塔

懐良親王は山川港上陸から五年後の正平二年（貞和三年、一三四七）十二月には肥後の宇土（現宇土市、熊本市の南方）に上陸し、翌年四月菊池の隈府守山（熊本県

菊池市)を征西府とした。

四 氏時の家督相続

大友家七代貞宗の五男氏泰は正平三年八月十八日、父貞宗の意志にそむき、武將としての器量が大きい同母弟の氏時(貞宗の七男)に家督を譲った。そのため、大友氏時が大友家八代目の家督を継ぎ豊後及び豊前守護職となった。しかし、国政はしばらくの間氏泰が握っていたようだ。兄氏泰の年齢は当時二十七、八歳、弟氏時の生年は不詳である。

この頃大友家の家督を継ぐことが出来なかった、氏泰の弟で氏時の異母兄氏宗(貞宗の六男)が南朝方となり、本家の氏時(北朝方)と対立することになる。

大友氏時は正平三年(貞和四年、一三四八)以前に豊後・豊前両国守護職を得ている。これは兄氏泰が氏時に与えた譲り状に足利尊氏が安堵状を与えたもので分かる。

氏時が家督を継いだ翌正平四年(貞和五年、一三四九)九月、尊氏の庶子足利直冬(直義の養子、義詮の異母兄)が逃れて九州に下る。

こうして九州は、宮方(征西宮懐良親王)、探題方(尊氏方、鎮西探題一色範氏)、佐殿方(直冬方)の三者鼎立の状態となり、宮方を挟んで離合集散を重ねることになる。

正平六年(観応二年、一三五二)八月二十一日、大友氏時、田原直貞(基直の子、貞広の父)、竹田津詮之らが南朝に降る。

正平七年(文和元年、一三五三)七月、大友氏時が再び南朝に背いた。

同年九月、足利義詮が大友氏時に所領所職を安堵し、ついで氏時を刑部大輔に奏請した。

同年十一月、鎮西探題一色範氏(頼行の弟、範光の父)は菊池武光(武時の子、武政の父)の協力を得て、足利直冬の立てこもる筑前太宰府原山城を攻撃した。十一月二十七日、足利直冬は一色勢の攻撃に破れ九州から長門(山口県)へ逃れたため、九州は再び南北朝の対立が激化し南朝軍の隆盛期を迎えた。

成平十年(文和四年、一三五五)二月、大友氏時が三世供養のため別府乙原の吉祥寺に宝篋印塔を寄進した。

この塔には追刻として「文和四乙年」「大友氏時之塔、二月廿一日」と刻銘され、乙原のラクテンチ南側付近にある吉祥寺跡に昌華祐和尚の開山塔と並んで現存している。当時は氏時の最盛期でもあった。

同年十月、征西宮懷良親王軍約十万の大軍が筑前上座郡から豊後の日田、玖珠、由布、大分郡狭間を経て豊後国府（大分市）に浸入しようとした。高崎山西麓の豊後赤松にて大友氏時の手勢が親王軍に襲いかかり、府中（大分市）入城を阻止しようとしたが、菊池武澄（武時の子、武光の兄）の武將城武顕の先陣と戦い敗走する。そのため、豊後国府が征西親王軍に占領され、大友氏泰、氏時兄弟が南朝方に降伏した。

赤松とは高崎山西麓の山間地域（現別府市南東部）に位置し、東側は大分市、南側は大分郡に接している。

豊後国府を占領した懷良親王は速見郡大神（日出町）、豊前宇佐、城井（福岡県京都郡犀川町城井神楽山城）、筑前殖木を経て博多に攻め入った。筑前殖木は直方市の北西部にあたり、現在JR筑豊本線「ちくぜんうえき駅」がある。

五 高崎山城の戦い

正平十三年（延文三年、一三五八）四月三十日、足利尊氏が九州征討に向おうとしていたがこの日病没する。

享年五十四歳である。そのため、九州の北朝足利方が不振となる。

同年十月、菊池武光が北朝方である日向の畠山義顕（宮崎県諸県郡高岡町穆佐院高城）を討つため大友氏時に出兵を命じたが、逆に氏時は高崎山城にこもり南朝に反旗を翻した。当時、氏時は三年半あまりかけて秘かに豊後高崎城（高崎山、標高六二八メートル）を造り、これに拠って菊池武光ら南朝軍の攻撃に耐えた。

同年十二月、征西宮懷良親王が大友氏時と豊後大分郡狭間（狭間町）で戦い、氏時を高崎山西麓の赤松に追う。

豊後大野郡朝地町の志賀惣領家五代志賀氏房（四代頼房の子、日向守）が速見郡赤松で懷良親王軍を迎撃し、これを撃退した。

正平十四年（延文四年、一三五九）四月、征西宮懷良親王、菊池武光（十五代、十二代武時の子）軍が豊後高

崎城（高崎山）攻撃に向かう、征西宮軍（南朝方）が高崎山を囲み大友氏時を攻めるが降伏せず、南朝軍が九重山麓を通って肥後に退く。

同年八月六日、征西府軍及び菊池武光軍四万騎と少貳頼尚軍六万騎とが筑後川大保原合戦（久留米市北東部、三井郡大刀洗町）で戦い、菊池武光が少貳軍を破り、頼尚を宝満山（筑紫野市と太宰府市との境）へ敗走させる。この戦いで大友氏時は少貳方として参戦した。

八月二十四日、大友氏時が足利二代將軍義詮（足利尊氏の嫡子）から、勢力を失った少貳氏に代わって肥後国守護職に任ぜられる。当時は、懐良親王以下の南朝軍と、大友氏時と少貳頼尚ら北朝軍が筑前・筑後・豊後で攻防をくり返していた時期であった。

同年十月二十三日、將軍義詮が大友氏時に大友本家のみが大夫姓を自称することを命令する。このため、大友宗家の権威が上がり、嫡子単独相統制が容易となった。

正平十四年（延文四年、一三五九）、足利義詮が大友氏時に菊池武光と菊池一族の所領の半分を与えることを約束し、また筑後国生葉莊地頭職（現福岡県浮羽郡）を

与える。

正平十六年（康安元年、一三六一）二月二十二日、義詮が大友氏時の肥後守護職を阿蘇惟国の二男惟澄（よひすけ）に与える。

同年四月、懐良親王は肥後の菊池武光に擁せられ、筑前太宰府を占領して征西府を開いた。このため、九州南朝軍の全盛期となる。

同年十月三日、九州探題斯波氏経（はもと）（高瀬の二男）が大友氏時に迎えられて豊後府中（大分市）に入る。やがて、氏経が高崎城に入った。

正平十七年（康安二年、貞治元年、一三六二）九月九日、征西府軍が豊後府中に進攻し高崎城攻めが行われる。

十一月三日、氏時の兄七代大友氏泰が死去した。享年四十二歳という。したがって、当時氏時は三十代である。

正平十八年（貞治二年、一三六三）九月十二日、將軍足利義詮が大友氏時を筑後守護職に任ずる。この筑後守護職は豊前守護職との国替えによるものである。

六 氏時の墓と大応寺

正平十九年（貞治三年、一三六四）二月、八代大友氏時が嫡子氏継に守護職（九代）を譲渡した。この頃、氏は速見郡鶴見村（現別府市鶴見）、朝見郷宝満寺（別府市河内田の口）等を所領していた。当時、氏時の所領は十一カ国、六十七カ所に及ぶという。

宝満寺は別府市誌によれば、当初は南側山上にあったが、大正二年（一九一三）山麓部の現在地（田の口バス停前、浜脇中学校西側山手）に移ったという。

正平十九年七月八日、將軍義詮が大友氏継に、豊後、筑後守護職を安堵する。

大友氏は八代氏時の嫡子九代氏継から氏継の第十代親世が、次に氏継の子で親世の甥にあたる十一代親考へと家督を譲っている。これは、すなわち氏継、親世両系統による「大友氏の家督の両統交立」の始まりで、十五代

（親繁まで続くことになる）。

正平二十三年（応安元年、一三六八）三月二十一日、八代大友氏時が死去した。一節には二月二十一日ともいう。

大友氏時の墓と伝える無縫塔（町指定有形文化財）が、大分郡庄内町庄内原小原大応寺にある。その碑文には「大応寺殿神州天祐大居士神儀、二豊両肥両筑壹对大守八代大友



乙原二十八人塚

註

1 豊後大友氏 芥川龍男著 新人物往来社 五五頁

2 同右 十三頁

3 別府市の文化財と保護樹 別府市教育委員会

平成四年三月 三五頁

4 同右 三五頁

5 別府市誌 昭和六十年 別府市役所 三四五頁

6 庄内町石造文化財写真真集(初版) 園田靖峰編集

平成二年八月 二〇頁

7 別府市誌 昭和六十年 別府市役所 三三四頁

8 大分百科事典 昭和五十五年 大分放送 一九二頁

参考文献

大分県の歴史 渡辺澄夫氏著 山川出版社

大分の歴史年表 渡辺澄夫氏編 大分合同新聞社

豊後大友物語 狭間 久氏著 大分合同新聞社

豊後大友一族 芥川龍男氏著 新人物往来社

大分百科事典 昭和五十五年 OBS大分放送

九州太平記 下津浦忠海氏著 葦書房

九州太平記

荒木栄司氏著

熊本出版文化会館



高崎城 (赤松より)